

「ニーベルンゲンの歌」における  
条件文の「型」について  
——中世高地ドイツ語における条件文の文型——

山下 豊

条件文を考える場合、二つの観点が必要となる。ひとつは、「文型」の点。もうひとつは、「動詞の法」の点である。

現代独語の場合、「文型」の点に関して言えば、二つの種類がある。ひとつは、「接続詞」を使う「接続詞型条件文」。もうひとつは、「直接疑問文型」を使う「直接疑問文型条件文」である。

「動詞の法」の点に関しても、やはり、二種類ある。ひとつは、「直説法」を使うもの。もうひとつは、「接続法Ⅱ（接続法過去）」を使うものである。ただ、ここでひとつ注意しておくべきは、「直説法」と一言で言ってしまうが、実際には、「直説法現在」と「直説法過去」の二つがあるということである。

さて、ここでは、上述の二つの観点の内、「文型」の点を中心に据え、「ニーベルンゲンの歌（Das Nibelungenlied）」をもとに、中世高地独語では、条件文がどのようなものであったか、見て行きたいと思う。

## I. 接続詞型条件文

### 1. 条件文の接続詞

現代独語の「接続詞型条件文」では、接続詞として、wenn を中心に、falls; sofern が使われ、雅語として、so が使われている。

Ich komme, wenn ich eingeladen werde. （私は、招待されれば、来ます）

Falls du Lust hast, du kannst mitkommen.

（君にその気があれば、一緒に来て良い）

Wir werden kommen, sofern es euch paßt.

(君たちがよければ、私たちは来ます)

Wir sehen uns wieder, so es das Schicksal will.

(運命がそうするつもりならば、私たちは、再び会えます)

また、複合型接続詞として、im Falle, daß や vorausgesetzt, daß というようなものもある。

Im Falle, daß du Lust hast, du kannst mitkommen.

(君にその気があれば、一緒に来て良い)

Das Unternehmen wird gelingen, vorausgesetzt, daß alle mitmachen.

(みんなが参加すれば、計画は成功するだろう)

「ニーバルンゲンの歌」で使われている条件文の接続詞には、どのようなものがあつたかと言えば、sô; alsô; als; swenne; swenne daz; obなどを挙げることができる。

#### 1) 接続詞 sô

条件文の接続詞として最も古くからあると言われているのが、このsôである。sôは、単独で使われるほか、他の語と結びつくことも多く、強調語alと結びついて出来たのが、alsôであり、それが縮約したものが、alsである。alsôもalsも、現代独語では、条件文に使われることはないが、中世高地独語では、条件文に使われていた。

sôの例として、1244詩節が挙げられる。最愛の夫ジーフリトを失い、悲しみにうちひしがれて日々を送るクリエムヒルトのもとに、フン族の王エッツェルから結婚の申し出が舞い込み、弟ギーゼルヘルが、その申し出を受けるように、クリエムヒルトに勧めている場面である。

1243 Dô sprach ir bruoder Giselher:      >swester, mir ist geseit,  
und wilz ouch wol gelouben,      daz ellie dîniu leit  
der kûnec Etzel swende,      und nimstu in ze einem man.  
swaz ander iemen râte,      sô dunket ez mich guot getân.<

1244 >Er mac dich wol ergetzen<,      sprach aber Giselher.  
>von dem Roten zuo dem Rîne,      von der Elbe unz an daz mer,  
sô ist kûnec deheiner      sô gewaltec niht.  
du maht dich freun balde,      sô er dîn ze konen giht.<

- 1243 その時、彼女の弟ギーゼルヘルが、言った。「姉上、人も言っているし、私も確信していますが、姉上がエッツェル王を夫にすれば、彼が姉上の悲しみをすべて消し去ってくれるでしょう。他の者が何と言おうとも、私には、それが良いことに思われます」
- 1244 「彼は必ず姉上の心を晴らしてくれるはずです」更にギーゼルヘルが言った。「ローヌ河からライン河まで、エルベ河から海に至るまで、あれほど力のある王は他にいません。彼が姉上を妻としたならば、姉上は、きっと幸せになれます」

alsô の例は、337詩節に見られる。ブルグントの王グンターが、イースラントの女王ブリュンヒルトを嫁にするために、命がけの競技に挑むことになり、ジーフリトは、それを助けるために、「隠れ蓑」を使うことにする。その「隠れ蓑」とは何であるかを説いている場面。

- 336 Sîvrit der muose fûeren die kappen mit im dan,  
die der helt küene mit sorgen gewan  
ab eime getwerge, daz hiez Albrich.  
sich bereiten zuo der verte die recken küene unde rîch.
- 337 Alsô der starke Sîvrit die tarnkappen truoc,  
sô het er dar inne krefte genuoc,  
zwelf manne sterke zuo sîn selbes lîp.  
er warp mit grôzen listen daz vil hêrlîche wîp.
- 336 ジーフリトは、かくして、蓑を携えて行くことになった。蓑は、勇者が危険を冒し、アルブリーヒという名の小人から獲得したものだ。勇敢であつばれな勇者たちは、旅の支度を調べた。
- 337 強きジーフリトが隠れ蓑を身につけたなら、大きな力が内に湧き、12人力を身に帯びた。彼は、大いなる策をもって、あの非常に美しい女性を得んとしていた。

als の例は、1178詩節に見ることができる。リュエデゲールが、エッツェル王の使者として、クリエムヒルトに結婚の申し出をしに、ブルグントの国に到着した際、ブルグントの国王グンターが、リュエデゲール一行の正体を知ろうと、ハゲネを呼んだ場面である。

- 1177 Dô die vil unkunden wâren in bekomen,

- dô wart der selben herren      vaste war genomen.  
 si wunderte wannen füren      die recken an den Rin.  
 der wirt nâch Hagene sande,      ob si im kûndec möhten sîn.
- 1178 Dô sprach der helt von Tronege:      >Ine hân ir niht gesehen.  
als wir si nu geschouwen,      ich kan iu wol verjehen,  
 von swannen si rîten      her in ditze lant.  
 si sulen sîn vil vremde,      ine habe si schiere bekant.<
- 1177 まったく知らない騎士たちが入って来た時、この騎士たちは、じろじろと見られた。この騎士たちがライン河畔に何処からやって来たのか、みんな不思議に思った。国主は、ハゲネを呼び寄せ、彼らが分かるか尋ねた。
- 1178 そこで、このトロネゲの勇者が言った：「私は、彼らを見たことがありません。もちろん我々が彼らをじっくり見れば、彼らがこの国に何処から来たのか、きっと言えましょう。彼らの正体が私にすぐに分からなかったら、彼らは、遙か遠くの国の者たちに違いありません」

## 2) 接続詞 swenne

現代独語の wenn の前身が、この swenne である。swenne は、sô wenne が合体し、縮約されたものと、言われている。

また、swenne は、daz を伴い、swenne daz という複合の形でも、条件文に使われていた。

swenne の例は、913詩節に見られる。ブルグント国の王グンターが、ジーフリトを暗殺するために、ジーフリトを狩りに誘い出すくだりである。

- 912 >Allen mînen gesten      sol man daz sagen,  
 daz wir vil vruo rîten.      die wellen mit mir jagen,  
 daz si sich bereiten;      die aber hie bestân  
 hōvschen mit den frouwen,      daz sî mir liebe getân.<
- 913 Dô sprach der herre Sifrit      mit hêrlîchem site:  
 >swenne ir jagen rîtet,      dâ wil ich gerne mite.  
 sô sult ir mir lîhen      einen suochman  
 und etelîchen bracken,      sô wil ich rîten in den tan.<

- 912 「私の客人達みんなに伝えてくれ、明朝、非常に早く我々が出かけることを。私と一緒に狩りに行きたい者は、準備をしておくように。また、婦人たちと此処にとどまる者、それも私には好ましいことだ」
- 913 そのとき、騎士ジーフリトが、晴ればれしく言った。  
 「あなたが狩りへ行かれるならば、私も喜んでご一緒します。  
 あなたが私に獵師を一人と獵犬を何匹か貸してくだされば、私は、森へ行きます」

swenne daz の例は、608詩節にある。グンターがブリュンヒルトをつれてブルグントのウォルメスに帰り、宴を開いた折に、ジーフリトが、グンターに約束を思い出させようとするくだり。

- 607 Ê daz der vogt von Rîne wazzer dô genam,  
 dô tet der herre Sifrit als im dô gezam.  
 er mante in sîner triuwe, wes er im verjach,  
 ê daz er Prûnhilde dâ heime in Îslande sach.
- 608 Er sprach: >ir sult gedenken des mir swuor iuwer hant:  
swenne daz frou Prûnhilt kœme in diz lant,  
 ir gæbet mir iuwer swester. war sint die eide komen?  
 ich hân an iuwer reise michel arbeit genomen.<
- 607 ラインの国王がそこに置かれた水を手に取る前に、騎士ジーフリトが、その場にふさわしく、行動した。  
 彼（グンター）が、ブリュンヒルトをその祖国イースラントで見る前に、彼（ジーフリト）にした約束を、彼（ジーフリト）は、彼（グンター）に思い起こさせた。
- 608 彼（ジーフリト）が、言った。「あなたが、みずから私に誓ったことを思い出してください。  
ブリュンヒルト女王がこの国へやって来たら、あなたは私に妹をくれるとのことでした。その誓いは何処へ行ってしまったのでしょうか。  
 私は、あなたの旅で、大いに骨を折りました」

### 3) 接続詞 ob

「ニーベルンゲンの歌」の中で、条件文に最も多く使われているのが、ob である。現代独語の ob は、もはや条件文に使われることはないが、中世高地独語の ob は、条件文の接続詞としては、中心的な存在であった。

ob の例としては、1416詩節が挙げられる。クリエムヒルトの策略で、グンターとハゲネをおびき寄せるために、ブルグントへ使者をおくることになり、その使者に言付けを伝えているくだり。

1415 Und swaz ir mîner friunde immer muget gesehen  
ze Wormez bî dem Rîne, den sult ir niht verjehen  
daz ir noch ie gesæhet betrüebet minen muot.  
unt saget mînen dienst den helden küene unde guot.

1416 Bittet daz si leisten daz in der kûnec enbôt,  
unt mich dâ mite scheiden von aller mîner nôt.  
die Hiunen wellent wænen daz ich âne friunde si.  
ob ich ein ritter wære, ich kœme in etwenne bî.

1415 また、そなたたちが、ライン河畔のウォルメスで、誰か私の親族に会えたとしても、私が心沈んでいたのを見たなどと、言うてはなりません。また、勇敢で立派な騎士たちに、くれぐれも宜しく伝えてください。

1416 王が申し出たことを、彼らが果たし、それで、私を悩みの種から救うよう、頼んでください。  
フン族の人々は、私に身寄りがないと、思ってるようです。  
私が騎士ならば、折を見て、彼らのもとに行けますものを。

## 2. 接続詞型条件文における「定動詞の位置」

現代独語では、条件文は従属文なので、定動詞は後置される。

Wenn du ein Dichter werden willst, so komm zu mir.<sup>1)</sup>

(そなたが詩人になりたいのであれば、私のところへ来なさい。)

ところが、中世高地独語の場合には、定動詞が後置されるとは限らない。「ニーベルンゲンの歌」の中では、定動詞が様々な位置に現れる。

sô 条件文の場合では、1171詩節にその例を見ることができる。エツツェル王の使者として、リュエデゲールが、ブルグントのウォルメスへ赴くことになり、妻のゴテリントと交わした会話の一部。

1171 Dô sprach der marcgrâve: >triuinne mîn,  
die mit mir sulen rîten hinnen an den Rîn,  
den sult ir minneclîchen bieten iuwer guot.  
sô helde varent rîche, sô sint si hôhe gemuot.<

1171 その時、辺境伯（リュエデゲール）がいった。「我が妻よ、私と共にここからラインへ行く者達に、情深く、そなたの富をやってほしい。  
騎士は、豪華ないでたちで旅をすると、意気が上がるのだ」

動詞 varn（旅をする）の直説法現在・3人称複数形 varent が、後置されずに、riche（豪華に）の前に置かれている。主語は、helde（騎士たち）。

swenne 条件文の場合は、1639詩節を例にとることができる。フン族の国へ向かうグンターの一行が、リュエデゲールの国に入り、国境を守っていたエッケワルトに、ハゲネが、宿泊させてくれるところはないかと、訊いた場面。

1638 Dô sprach aber Eckewart: >ich zeige iu einen wirt,  
daz ir ze hûse selten sô wol bekommen birt  
in deheinem lande, als iu hie mac geschehen,  
ob ir vil snelle degene wellet Ruedegêren sehen.

1639 Der sitzet bî der strâze und ist der beste wirt,  
der ie kom ze hûse. sîn herze tugende birt,  
alsam der sûeze meije daz gras mit bluomen tuot.

swenne er sol helden dienen, sô ist er vrœlich gemuot.<

1638 そこでまた、エッケワルトが言った。「私があなたにひとりの領主を教えてあげましょう。そうすれば、あなたは、館において、どこの国でもありえない、起こりうるかぎりの立派さで、もてなしを受けることでしょう。極めて勇猛な騎士のあなたが、リュエデゲールに会うつもりなら。

1639 あの方は、この筋道に居を定め、これまで館に來た者で、最高の領主です。彼の心は、徳を生みます。麗しい5月が、草に花を咲かせるように。

あの方は、騎士の面倒が見られれば、幸せなのです。

助動詞 soln の直説法現在・3人称単数形 sol は、主語 er (彼) の直後にあり、後置されてはいない。

ob 条件文の場合は、その例を1273詩節に見ることができる。クリエムヒルトが、エッツェルに嫁ぐことになり、その準備の際に、ニーベルンゲンの黄金を、フン族に分かち与えんために、運び出そうとする。その話をハゲネが耳にしたくだけり。

1272 Er sprach: >sit mir frou Kriemhilt nimmer wirdet holt,  
sô muoz ouch hie beliben daz Sifrides golt.  
zwiu solde ich mînen fienden lân sô michel guot?  
ich weiz vil wol waz kriemhilt mit disem schatze getuot.

1273 Ob si in bræhte hinnen, ich wil gelouben daz,  
er wurde doch zerteilet ûf den mînen haz.  
sin habent ouch niht der rosse, die in solden tragen.  
in wil behalten Hagene, daz sol man Kriemhilde sagen.<

1272 彼(ハゲネ)が言った。「クリエムヒルト姫は決して私に好意を持たないだろうから、ジーフリトの黄金は、やはり、ここにとどめておかなければなりません。

どうして私が、あの莫大な財宝を、私の敵に委ねられましょう。私には非常に良く分かります、クリエムヒルトが、この財宝で、何をするのか。

1273 彼女がそれを此処から持ち出したならば、私が思うに、それは、いずれにしても、私への憎しみのために、分配されましよう。

彼女は、また、それ(黄金)を運べる馬も持っていません。

それをハゲネが保管するつもりだと、クリエムヒルトに伝えてください」



動詞 bringen (持つて行く) の接続法過去・3人称単数形 brächte は、後置されずに、hinnen (ここから) の前に置かれている。主語は、si (彼女)。

## II. 直接疑問文型条件文

現代独語の条件文には二つの型があり、そのひとつが、上述の接続詞型条件文であり、もうひとつが、直接疑問文型条件文である。

Wäre es allein auf die Klugheit angekommen, so hätte dieser Zwerg ruhig im Rat der Zehn sitzen oder eine Gesandtschaft verwalten können.<sup>2)</sup>

(賢さのみが問題だったならば、この小人は、10人会議の席を悠々と占めることができるか、公使館を牛耳ることが出来ていただろう。)

中世高地独語においても、この型の条件文があった。

1153詩節に、その例を見ることが出来る。リュエデゲールが、エツェル王の使者として、ブルグントへ行くことになり、エツェルが、リュエデゲールに、その準備として、財を分け与えようとした折に、リュエデゲールが、辞退する場面。

1153 Des antwurte Ruedegêr, der marcgrâve rîch:  
>gerte ich dînes guotes, daz wære unlobelîch.  
ich wil dîn bote gerne wesen an den Rîn  
mit mîn selbes guote, daz ich hân von der hende dîn.<

1153 それに対して、あっぱれな辺境伯リュエデゲールが答えた。

「私があなたの財産を所望したならば、それは不名誉となりましょう。

私は喜んであなたの使者となり、ラインへ行きますよう、  
あなたがみずから私にくれた私自身の財産で」

動詞 gern (求める) の接続法過去・1人称単数 gerte が、主語 ich (私) の前にあると共に、文頭に位置しており、いわゆる定動詞倒置をしている。

だが、中世高地独語の場合、現代独語とは多少趣が異なり、「定動詞倒置」と言う言葉では言い表せないような、むしろ「定動詞文頭」とでも言った方がふさわしいような文がある。その例として、82詩節と、327詩節を挙げることができるだろう。

82詩節は、ニーデルラントの王子ジーフリトの一行がブルグントにやって来たのを見たグンター王たちが、何処から来た連中か分からず、それを知るためにハゲネを呼ぼうとしているくだり。

81 Des antwurte dem küene von Metzen Ortwin  
(rich ûnde küene mohte er wol sîn):  
>sit wir ir niht erkennen, nu sult ir heizen gân  
nâch minem œheim Hagenen: den sult ir si sehen lân!

82 Dem sint kunt diu rîche und ouch diu vremen lant.  
sint im die herren kûnde, daz tuot er uns bekant.  
der kûnec bat in bringen und die sînen man.  
man sach in hêrlîche mit recken hin ze hove gân.

81 それに関して、メッツのオルトウィーンが、王に答えた。  
(彼は、十分に立派で勇敢であった。)

「私たちが彼らを知らないのですから、あなた様は、私のおじのハゲネのもとへ行くように、お命じになられるべきです。あなた様は、彼に彼らを見させるべきです。

82 彼は知っています、諸国も外国も。

彼にとって、あの騎士たちが既知であれば、彼が、私たちに教えてくれます」

王は、彼を連れて来るように、命じた。そして、彼の家来をも。彼が、晴れやかに騎士たちをつれて、この城へやって来るのが、見られた。

動詞 sîn (いる、ある) の直説法現在・3人称複数形 sint が文頭に立っているが、主語 die herren (騎士達) がそれに続かず、er (彼) の3格 im の後に来ている。

327詩節は、イースラントの女王プリュンヒルトについて説明しているくだりである。

- 326 Ez was ein küneginne gesezzen über sê,  
 ir gelîche enheine man wesse ninder mê.  
 diu was unmâzen schoene, vil michel was ir kraft.  
 si schôz mit snellen degenen umbe minne den schaft.
- 327 Den stein warf si verre, dar nâch si wîten spranc.  
 swer ir minne gerte, der muose âne wanc  
 driu spil an gewinnen der frouwen wol geborn.  
gebrast im an dem einen, er hete daz houbet sîn verlorn.
- 326 海の向こうに、一人の女王が君臨していた。  
 彼女に並ぶものが、他の何処にもいないことは、明らかだった。  
 彼女は、限りなく美しく、彼女の腕力は、極めて強かった。  
 彼女は、勇猛な騎士たちと、愛を賭けて、槍を投げあつた。
- 327 彼女は、石を遠くへ投げ、その後、遠くへジャンプした。  
 彼女の愛を求める者は、美しく生まれたこの女性に、3つの競技  
 で、必ず勝たなければならなかった。  
その者が、そのひとつに敗れたら、首を失うことになった。

非人称動詞 gebresten (欠けている) の直説法過去・3人称単数形 geb-  
 rast が、文頭に来ているが、非人称動詞なので、主語がない。

### Ⅲ. 平叙文型条件文

現代独語にはなく、中世高地独語に見られるのが、この平叙文型条件  
 文である。この型の条件文は、接続詞をとることも、特別な語順をとる  
 こともなく、ごくごく普通の型の文が、条件文へと転じるものである。  
 ただひとつ違う点は、そこには接続法が使われる。

平叙文型条件文の例として、965詩節を挙げることができる。ブルグ  
 ント国の王グンターの狩りの一行が、食事をすることになったが、その  
 際に、ぶどう酒が用意されていなかったことに対して、ジーフリトが不  
 満を漏らす場面である。

- 965 Dô sprach der herre Sifrit: >wunder mich des hât,  
 sît man uns von des kuchen gît sô manegen rât,

warumbe uns die schenken bringen niht den win.

man enpflege baz der jegere, ich enwil niht jagetgeselle sin.

966 Ich hete wol gedienet daz man mîn baz næme war.<

965 その時、騎士ジーフリトが言った。「私が不思議に思うのは、台所から非常にたくさんのものが、我々に与えられているにもかかわらず、どうして献酌侍従が我々にぶどう酒を持って来ないのか、ということです。

狩人たちをもっと丁重に扱ってくれないのであれば、私は、狩りの仲間でいたくはない。

966 私は充分に仕えたのだから、もっと良い扱いを受けても良いはずだ」

主語の man (人) が文頭にあり、2 番目の位置に、動詞 enpflegen (扱わない) の接続法現在・3 人称単数形 enpflege が来ており、平叙文の型をとっている。

man enpflicht … 直説法現在・3 人称単数形

man enpflege … 接続法現在・3 人称単数形

man enpflicac … 直説法過去・3 人称単数形

man enpflæge … 接続法過去・3 人称単数形

なので、man enpflege は、明らかに、接続法現在・3 人称単数形である。

#### IV. 条件文と認容文

条件文と認容文には、共通点がある。現代独語では、条件文と認容文に、接続詞 wenn が、共通して使われる。あるいは、直接疑問文型の文が、共通して、使われている。もちろん、現代独語では、副詞 auch などにより、条件文と認容文の区別をしている場合が多い。概して言えば、副詞 auch があれば、認容文、auch がなければ、条件文である場合が多い。

wenn 条件文 (接続詞型条件文) … auch が無い。

Verzeihe mir, wenn ich gegen den Gehorsam zu verstoßen scheine, den der Sohn dem Vater schuldet.<sup>3)</sup>

(息子が父にしななければならない服従に, 私が反しているように見えるならば, お許してください。)

wenn auch 認容文 (接続詞型認容文) … auch が有る。

Aber du weißt, wie sehr es mein Verlangen ist, in der Kunst der Dichter mich auszuzeichnen, und wenn auch einige meiner Freunde meine Gedichte loben, so weiß ich doch wohl, daß ich noch ein Anfänger und noch auf den ersten Stufen des Weges bin.<sup>4)</sup>

(だが、御存知のように、詩芸術において抜き出したいという私の希望は非常に強く、また、若干の友人が、私の詩をほめているにしても、私がまだ初心者であり、この道の第一段階にいるに過ぎないことを、私は充分に知っています。)

直接疑問文型条件文… auch が無い。

Oder ist etwas zwischen dich und deine Braut gekommen, so sage es mir, daß ich dir helfen kann, sie zu versöhnen oder dir eine andere zu verschaffen.<sup>5)</sup>

(あるいは、お前と許婚者の間に何か起きたのならば、そのことを私に言いなさい。そうすれば、私はお前を助けることができる。彼女をなだめたり、お前のために他の人を探したりだの。)

直接疑問文型認容文… auch が有る。

Es ist unbeschreiblich, welche Sehnsucht ich empfand, nur eines Menschen ansichtig zu werden, wäre es auch, daß ich mich vor ihm hätte fürchten müssen.<sup>6)</sup>

(その人を怖ろしいと思うに違いないとしても、ただただ人に会いたいという切実な思いをどれほど感じたか、言い表せないほどです。)

ところが、それに対して、中世高地独語のこの種の条件文と認容文は、帰結文を見ないと、条件文か認容文か、分からない場合が多い。条件文と認容文の間に違いが無いからである。そもそも、条件文も認容文も、ある事柄を提示する点では、同じである。提示した事柄に帰結文が

縛られた場合が、条件文であり、提示した事柄に帰結文が縛られなかった場合が、認容文となるに過ぎない。それゆえ、条件文と認容文が同じ型の文であっても、不思議は無い。

接続詞型条件文 (ob 条件文) の例としては、375詩節を挙げることが出来る。ブルグントの王グンターの求婚の旅に際し、同伴するジーフリトに、クリエムヒルトが、兄グンターの警護を頼み、それに対して、ジーフリトが、答えるくんだり。

375 Dô sprach der degen rîche: >ob mir mîn leben bestât,  
sô sult ir aller sorgen, frouwe, haben rât.  
ich bringe in iu gesunden her wider an den Rîn,  
daz wizzet sicherlîchen. < im neic daz schoene magedin.

375 そこで、あっぱれな騎士（ジーフリト）が、言った。「私に生命があるとしたら、姫よ、あなたは、あらゆる危険に対し、救いを持つことになります。

私が彼を無事にあなたのもとへ、そこから再びラインの畔へ、つれて帰ります。

そのことを確かに約束します」 美しき乙女が彼に感謝で頭を下げた。

接続詞型認容文 (ob 認容文) の例としては、606詩節が挙げられる。ブルグント国の王グンターが、イースラントの女王ブリュンヒルトを妻とし、帰国した際に、宴を開き、その宴が稀に見る豪華さだったことを、述べるくんだり。

605 Vil manec hergesidele mit guoten tavelen breit  
vol spîse wart gesetzt, als uns daz ist geseit.  
des si dâ haben solden, wie wêneç des gebrast !  
dô sach man bî dem kûnege vil manigen hêrlîchen gast.

606 Des wirtes kamerære in becken von golde rôt  
daz wazzer fûr truogen. des wære lûtzel nôt,  
ob iu daz iemen sagte daz man diene baz  
ze fûrsten hôchgezite; ich wolte niht gelouben daz.

605 非常に多くの座席が、たっぷりと食べ物を用意した食卓と共に、

置かれていた。そのように我々は、聞いている。

彼らがその場で必要とするものは、何ひとつ欠けてはいなかった。

そこでは、王のそばに、非常に多くの高貴な客たちが、見られた。

606 城主の侍従たちが、黄金の鉢の中に水を入れ、運んで来た。

王の宴でこれ以上に豪華なもてなしをしていたことがあったと、

誰かがあなたに言ったとしても、それは根も葉もないことだろう。

私はそんなことを信じはしない。

条件文 ob mir mîn leben bestât (私に生命があるとしたら) と、

認容文 ob iu daz iemen sagte (誰かが貴方にこの事を言ったとしても) との間に、条件文であるか認容文であるか、区別できる要素は見当たらない。

直接疑問文型条件文の例は、1646詩節にある。フン族の国へ向かうグンターの一行が、リュエデゲールの国に入り、リュエデゲールに一夜の宿泊を求める。それに対して、リュエデゲールが答える場面。

1646 Mit lachendem munde antwurte Ruedegêr:

>nu wol mich dirre mære, daz die kûnege hêr  
geruochent mîner dienste, der wirt in niht verseit.  
koment si mir ze hûse, des bin ich vrô unt gemeit.<

1646 笑いながら、リュエデゲールが答えた。

「さて、この話は嬉しいことよ。あつぱれな王たちが私の奉仕を望むとは。

この城主(私)は、彼らを拒みはしない。

彼らが私の城に来るならば、私は、それが嬉しく、喜ばしい」

直接疑問文型認容文の例としては、1248詩節が挙げられる。フン族の王エツェルから求婚され、周囲の者達からも勧められ、悩むクリエムヒルトを描いた場面。

1248 Si gedâhte in ir sinne: >und sol ich mînen lip

geben einem heiden (ich bin ein kristen wîp),  
des muoz ich zer werlde immer schande hân.

gæbe er mir elliu rîche, ez ist von mir vil ungetân.<

1248 彼女(クリエムヒルト)は、心の中で思った。「私が異教徒の男に

身を捧げることにでもなれば、(私はキリスト教の女だから)、私は世間に対していつまでも恥をかかなければならない。  
あの人が私に国を全部くれたとしても、それを(異教徒の妻となることを)私は決してしない」

条件文 *koment si mir ze hūse* (彼らが私の城に来るならば) と、  
認容文 *gæbe er mir elliu rīche* (あの人が私に国を全部くれたとしても) との間に、条件文であるか認容文であるか区別できる手がかりはない。

以上、「ニーベルンゲンの歌」をもとに、中世高地独語の条件文の文型について見て来たが、その結果、その特徴として挙げられるのは、以下の通りである。

- (1) 接続詞型条件文の場合、定動詞が後置されなければならないわけではない。
- (2) 直接疑問文型条件文の場合、定動詞が、倒置されると言うよりも、文頭にあることが重要と言える。<sup>7)</sup>
- (3) 平叙文と同じ型の文が、条件文に使われる場合がある。
- (4) 中世高地独語の条件文は、認容文と区別なく使われている。<sup>8)</sup>

## 註

- 1) Hermann Hesse: *Der Dichter* (91~98頁の内, 92頁36~93頁1行)
- 2) Hermann Hesse: *Der Zerg* (7~28頁の内, 8頁33~35行)
- 3) Hermann Hesse: *Der Dichter* (91~98頁の内, 93頁16~18行)
- 4) Hermann Hesse: *Der Dichter* (91~98頁の内, 93頁18~22行)
- 5) Hermann Hesse: *Der Dichter* (91~98頁の内, 93頁32~34行)
- 6) Ludwig Tieck: *Der blonde Eckbert* (43~63頁の内, 47頁28~31行)
- 7) ただし、上述例1248詩節に見られるように、条件文の前に接続詞 *und* が添えられることもある。

und sol ich mīnen līp  
geben einem heiden

(私が異教徒の男に身を捧げることにでもなれば)



8) ただし、ここでは触れなかったが、認容文には、swieなどの認容文専用の接続詞もある。

### 資料

Das Nibelungenlied 1; Fischer Taschenbuch 6038; Frankfurt am Main 1984

Das Nibelungenlied 2; Fischer Taschenbuch 6039; Frankfurt am Main 1983

Hermann Hesse: Die Märchen; Suhrkamp Taschenbuch 291; Frankfurt am Main 1979

Märchen der Romantik 1; Insel Taschenbuch 285; Frankfurt am Main 1981

Paul/Mitzka: Mittelhochdeutsche Grammatik; Max Niemeyer Verlag; Tübingen 1960

Behaghel: Deutsche Syntax III ; Carl Winter's Universitätsbuchhandlung ; Heidelberg 1928

Duden 4: Die Grammatik; Duden Verlag; Mannheim 1973

Duden 9: Die Zweifelsfälle der deutschen Sprache; Duden Verlag; Mannheim 1972

Jung: Grammatik der deutschen Sprache; VEB Bibliographisches Institut ; Leipzig 1980

Helbig/Buscha: Deutsche Grammatik; VEB Verlag Enzyklopädie; Leipzig 1977

Lexer: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch; S. Hirzel Verlag; Stuttgart 1992

Lexer: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch; S. Hirzel Verlag; Stuttgart 1970

Benecke/Müller/Zarnke: Mittelhochdeutsches Wörterbuch; Georg Olms Verlag; Hildesheim 1986

古賀允洋：演習中高ドイツ語文法 大学書林 昭和54年8月20日 第1版

伊東泰治ほか：中高ドイツ語小辞典 同学社 1991年11月15日 初版発行